

電子書籍をめぐる動きが活発になってきたが、紙の本との違いを考へる手がかりを与えるのは、酒井邦嘉『脳を創(つく)る読書 なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか』(実業之日本社)という本である▼著者は東京大学大学院総合文化研究科准教授で、言語脳科学を専攻する立場から、この本を書いた。

副題の印象では、「紙の本」礼讃論のように見えるが、電子書籍も認め、「両方のよさを享受」すべきだという▼しかし、電子辞書と紙の辞書を比較したくだけりでは、こんなことを書いている。△短い時間で見出し語を探せる点では「電子辞書」のほうがまさるのには仕方がない。しかし、見出し語から先の検索では、実は紙のほうが、スクロールを必要とする電子辞書よりも早くサーチできるのだ▼そして、△電子辞書で

来風

は全く働かない量的な感覚が、紙の辞書では有効に使える▽と指摘し、こう述べている。△漢和辞典などはその典型で、使えば使うほど、ある一つの部首を持つ漢字がどのくらいあるかが、辞書の実際のページの厚みとして感覚的にわかってくる▽▼その結果、△ある部首の何画の漢字ならこのへんに載っている、というような勘が働くようになる▽という。だから、△学習につながる目的で辞書を使うのなら、電子辞書より紙の辞書を持ちたいものだ▽と書いている▼そして、紙の本には△愛着を持って何度も繰り返し読めるという楽しみだけでなく、所有するだけの「積ん読」の楽しみもある▽が、△電子書籍は所有する楽しみがほとんどない▽とも書いている。両者の違いは、この辺にもありそうだ。